

第19回 越中般若野の合戦と長尾能景の討死



散居村展望台から砺波平野（般若野方面）を望む（砺波市）

本願寺実如^{※1}が、北陸の守護勢力の足許を脅かす目的で、真宗本願寺門徒に一齐蜂起を指令したことに始まる永正3年（1506）の一向一揆は、北陸の政情に大きな混乱を生んだ。

同年4月頃には、越中国においても、加賀の一向一揆の支援を受けた一向宗徒の軍事行動が活発化していた。こうした一揆衆の勢威に圧されて、先に越後に逃れていた越中の国衆（武士）が、5月には、越後の守護勢力の支援を得て、帰国する動きもみられた。

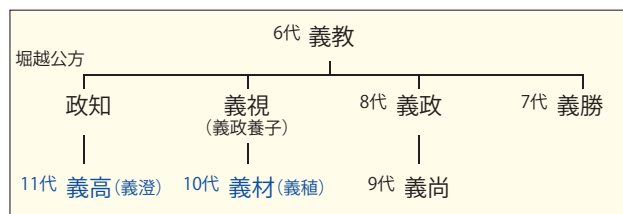
その背景には、前將軍足利義材^{※2}の將軍復歸を後押しする越中国守護の畠山尚順^{※3}が、河内から京都に進攻する動きがあった。先の明応2年（1493）に、足利義高（義澄）を擁立して、將軍義材を追放し、尚順の父畠山政長を討った幕府管領細川政元^{※4}は、これに危機感を抱いた。そこで予てより友好関係にあった実如に、北陸一向一揆の蜂起を要請し、実如がそれに応

えたのである。

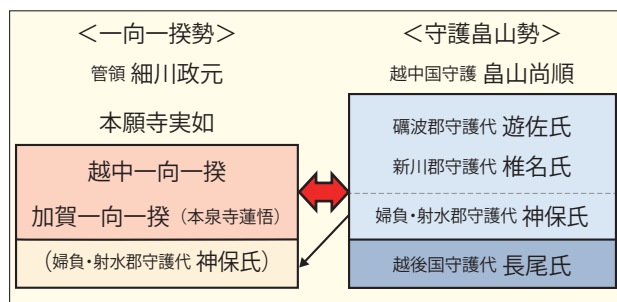
同じ頃、越前国においても、前將軍義材を支援する守護朝倉貞景^{※5}に対し、本願寺の指令で、越中・能登・加賀の門徒衆が攻め入り、大規模な一向一揆が起こっていた（詳細は北陸歴史探訪第9回を参照ください）。

長尾能景^{※5}の越中進攻

永正3年6月から8月にかけて、越中では帰国した守護勢力と蜂起した一向一揆の間で、礪波郡や婦負郡などで戦闘が展開されていたらしい。8月18日には、礪波郡守護代の遊佐慶親の指揮下にあった殖生与七郎^{※6}が、一揆勢に攻められ危機に陥っていた婦負・射水郡守護代の神保慶宗^{※6}を救援するため、婦負郡寒江（現



【足利將軍家系図】



【越中一向一揆対立図】

- ※1 本願寺第9世（蓮如の五男）。本願寺門徒に、反本願寺・反細川氏を標榜する越前朝倉氏と能登・越中の畠山氏を攻めるよう命じる。
- ※2 10代將軍、後の義植（よしたね）。9代義尚が早逝したため將軍となったが、管領細川政元と対立し將軍職を追われる。越中・越前に逃れ、“越中公方”と呼ばれた。
- ※3 管領畠山政長の子で、紀伊・河内・越中国の守護。越中には不在で、3名の守護代に統治を委任。
- ※4 日野富子らとともに10代將軍義材を追放し、義高（義澄）を擁立（明応の政変）。幕府管領として幕政を牛耳る。父は応仁の乱で東軍を率いた細川勝元。
- ※5 越後国守護代。畠山尚順の要請により越中に進攻するが、神保勢の裏切りにより越中般若野で討死。子の長尾為景は越中に侵攻し、越後国守護代に加えて越中新川郡の守護代となり越中東部の支配を認められる。孫の長尾景虎は、後の上杉輝虎（謙信）。

富山市呉羽地区)の蓮台寺^{れんだいじ}に赴き、敵方を撃破して、慶親から戦功を賞されていた。

こうした状況の中で、一向一揆勢と一進一退を重ねる越中の守護勢力の苦境を助援するため、越後国守護代の長尾能景が、守護所のあった越後の府中(直江津)を発ち、軍勢を率いて越中国に進攻した。

それに先立つ同年3月には、越中の本願寺門徒の戦いを後方支援し指揮していた、加賀一向一揆を主導する河北郡若松(現金沢市若松町)の本泉寺蓮悟(本願寺蓮如の七男)が、当時能登国においても、守護畠山氏が数年来越後の長尾能景と結んで、門徒に弾圧を加えていることを嘆く一方で、北陸の門徒衆に一層の奮起を促している。

当時越後の長尾、能登の畠山、越前の朝倉と越中の神保・遊佐氏らの守護勢力の間では、本願寺門徒による一向一揆に対し、共同戦線が張られていた。能景の越中出陣は、そうした動きのもとでみられたものであった。

■ 般若野荘内芹谷野の合戦

越中に入った長尾能景は、各地で一揆衆と転戦するなかで、9月19日の礪波郡般若野荘内の芹谷野(現砺波市)の合戦で、一揆勢と戦い不慮の戦死を遂げることになる。合戦の詳細は不明であるが、この合戦では、越中の一向衆が能景軍に勝利し、越後衆の多くが命を落としたとされている。

このとき能景に従っていた越後の水原景家も討死したらしく、閏11月26日になって、越後国守護の上杉房能が、国許に暮らす娘の禰々松に、般若野合戦で討死した父の戦功を賞し、その遺跡の相続を認め、本領安堵を行っていた。

またこの合戦には、遊佐慶親配下の殖生次郎兵衛や同与七郎も、能景らと共に一揆衆と戦っていたらしい。一方、一揆方でも加賀国河北郡寺尾(現津幡町越中坂)の光現寺玄祐が、越中の門徒衆に加わり、長尾軍と戦い、討死していたのも知られる。なお能景が討死した場所については、芹谷野ではなく、礪波郡の蓮沼(現小矢部市)との説もある。

長尾能景の戦死によって、越後勢はいったん越中から撤退することになった。同年11月15日、本願寺実如は、越中の坊主衆と同国四郡の門徒衆に対し、越中

における守護方との合戦の勝利にともなう活躍を賞した。さらに越中国の坊主・門徒への本願寺からの沙汰は、加賀の若松本泉寺蓮悟を通して行う旨を伝達し、四郡のしかるべき在所に城砦を構え、越中における一向一揆体制を堅固なものにするよう命じていた。

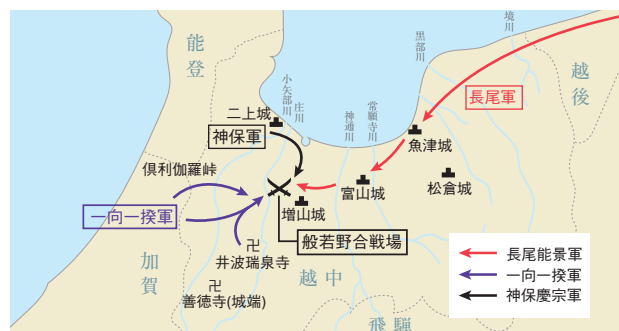
このことから永正3年の一向一揆で勝利した越中では、引き続き加賀の若松本泉寺の配下に、坊主・門徒衆が置かれていたのがわかる。本泉寺は、室町期以来、越中礪波郡の大坊主である井波瑞泉寺の住持も兼帯していた。

■ 能景戦死の敗因

長尾能景が般若野荘内の芹谷野で討死した敗因については、後の永正16年(1519)に越中に侵攻した能景の子息の為景が、「父の敗死は、神保慶宗の所業によるもの」と主張し、「自身の越中出兵は、慶宗を討伐して遺恨を晴らすのが目的」だと述べている。

その語るところによれば、「慶宗ら越中の守護方を支援するため能景が出馬したにもかかわらず、越中における能景の軍事行動に、慶宗が土壇場で全く協力しなかったのが、能景敗死の原因」とする。さらに「父の戦死に対し、越中国守護の畠山尚順から、労いの手紙一通もなかったのは情けないことで、それも守護代であった慶宗の仕業によるもの」と激怒している。

この長尾為景の主張を裏付ける史料はないが、慶宗が友軍である能景勢を救援せず、能景をみすみす討死に追いやったことは疑いなく、それが為景をして慶宗の裏切り行為と映ったものであった。慶宗が何故かかる行動をとったかは定かでないが、般若野(芹谷野)の合戦後には、一向一揆と和議を結んでおり、これがやがて長尾為景の越中侵攻につながることになる(詳細は北陸歴史探訪第5回を参照ください)。



般若野の合戦における各軍の進路

※6 畠山政長に臣従し、越中神保氏の最盛期を築いた神保長誠(ながのぶ)の子。一向一揆の際、長尾軍とともに一揆勢を撃破するが、その後長尾勢に非協力的となり、長尾能景が討死。以後両家は宿敵関係となる。

過去の北陸歴史探訪は、北陸経済研究所のHP(調査・レポート/北陸歴史探訪)からご覧ください。

・第5回「長尾為景の越中進攻と守山城」(2024年11月号)

https://www.hokukei.or.jp/contents/pdf_exl/hokuriku-rekishi2411.pdf

・第9回「越前朝倉氏と九頭竜川合戦」(2025年5月号)

https://www.hokukei.or.jp/contents/pdf_exl/hokuriku-rekishi2505.pdf

第5回



第9回

